

咲—Saki—二度目の人  
生は雀士として

468 (ヨルハ)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「咲—S a k i—」を知らない少年が少しだけ変わった「咲—S a k i—」の世界に転生して全国のヒロインたちと出会いながらイチャイチャたまに麻雀な生活を送る、そんなお話。

咲—S a k i—の小説を読んで自分の好きなヒロインとオリ主がイチャイチャしてるものがない！

ないなら書いてしまえということで見切り発車気味に書きました。

オリ主とヒロインたちがたがいチャイチャしたりします。

〈注意〉

この小説は先のプロットは基本的に作らず書いてるので投稿が不定期で今後物語の中で矛盾が生じる可能性があります。

そして、三人称視点とキャラクターの一人称視点が入り交じっています。

上記の注意点をご留意の上で閲覧をしていただけるようお願いいたします。

# 目次

転生編

第0局 覚醒

—————

1

第0・5局 追憶

—————

6

幼少期編（原作開始前）

第1局 自覚

—————

11

第2局 能力

—————

18

第3局 巫女

—————

36

第4局 開花

—————

47

第5局 敬慕

—————

63

## 転生編

### 第0局 覚醒

「……………ん、うん……」

——生き、てるの……？

まだ醒めきれない頭を手で押さえながら、一人の少年はゆっくりと体を起こす。しかし、バランスを崩したのか再びベッドに倒れこむ。

「……………へ？」

なにかがおかしい。

いくら自分が病弱だからといってさすがにベッドから起き上がれないほどではなかった。

最期こそまともに体を動かせなかったが基本は車椅子での移動で、自分で乗るくらいはできるし少しなら立つて歩くこともできた。

いや、そもそもそんな問題じゃない。

違った。何もかもが。

まず、目に映る光景から違う。

僕は病院に入院していた。ならば、目に映るべきは白で統一された病室の一角であるはず。それが今目の前にあるのは明らかに“洋室”の一角。落ち着いた配色でダンスなどの家具がズレなくきれいに配置されている。間違っても病院で見られるものじゃない。

次に体だ。

体が軽い。物理的にもそうだが、毎日感じていた倦怠感、それがきれいさっぱりなくなっている。それに呼吸も楽だ。いつもならどこか息苦しいと感じていたそれがまるでない。病気であることが嘘だったかのように心地よい。さらに言えば手が小さい。どう見たところで小学生にも達していないほど小さく柔らかかそうな両手。そこから視線を胴体に移すと、これまた小さい。着ている寝巻もいつもの病院用のもではなくい

かにも子ども用のものである。

最後に声である。

先程出た声はとても自分のものとは言えないほど丸みのある高い声だった。

この時点である仮説「ー」といってもほとんど確信に近いもののだがあまりにも現実離れしすぎていて信じたくないという気持ちが強かった。

その仮説を確かめるため、あたりを見回す。そして、すぐに見つかった。視界の先には壁掛けの大きな姿見。そこに映りこんだのはベッドに横になり自分を見つめ返す少年。

純銀を溶かしこんだような色と艶のあるふわつとした柔らかそうな髪は外から差し込む朝日に反射してキラキラと煌めき、そんな髪から覗くのは子ども特有のクリつとした大きな朱い瞳。

顔の造形自体は日本人のそれに近いが、そんな髪と瞳が相まってその存在自体が夢のような、触れれば霞んで消えてしまいそうな、そんなどこか幻想的な印象を抱かせる。

ー夢は夢だと認識できないっていうけど、これは本当に夢なんじゃないのかな……  
なんて、思った瞬間、

頭の中が、はじけた。





ここでいよいよ痛みには耐えきれなかったのか意識をとばして倒れこむ。  
その直前、

「お、かあ……さん………」

か細い声で、そう呟いていた。

## 第0・5局 追憶

向井遼太は病弱である。

とても重い心臓の病気らしく、物心がついたころには既に入院生活が始まっており、彼の生活の半分以上はベッドの上だった。

まったく体を動かせないわけではなかったが、数分歩くだけで動悸が激しくなり胸に激痛が走り、最悪気絶してしまう。

よって移動には必ず車椅子に乗る必要があり、外に出るなどもつてのほかだった。

それでも遼太は塞ぎこむことはなかった。

幸い病院内ではある程度自由にはできたので、よく個室から抜け出しては他の病室に遊びに行き、自分より小さい子供たちとは一緒に絵を描いたりトランプでマジックを披露したり、自分よりずっと年上の老人たちとは将棋やチェスで勝負したり麻雀の卓に混ざってうったりするなど、積極的に人とかわわりを持つようになっていった。

将棋やチェスはともかく、麻雀に関しては主に母親から「なにやってるの」と怒られ

することもしばしばあったが。

しかし、そういった出会いがあれば当然別れもある。

病院という場所においてはそれは特に顕著だった。

退院する人、転院する人、はたまた亡くなる人も。

人のことが好きな、人とのつながりを大切にすゝる遼太は当然悲しくなつた。

退院する人は素直に誰かが治つたことが嬉しかつたし、喜びもした。

しかし、転院でお別れする人、特に亡くなつて別れた日の悲しみは自分の病気を治す

方法がないと知つた時よりも大きいものであつた。

何日泣いたかわからない、何人の人と別れたかなんて覚えられないほどの数を遼太は

経験した。

逆に言えば、それはそれだけ多くの人とつながつていたということでもある。

別れるのが嫌ならそもそも出会わなければいい、遼太もそう思つた時期はあつたし、

実際に一時期とはいえ塞ぎこんだこともあつた。

しかし、それでも遼太は人と関わることをやめなかつた。

遼太は知つていた、信じていたのだ。人とつながることでは強くなれると

いうことを、人とのつながりが、自分に、そして他の人にも勇氣と力をくれるのだと。

無駄な出会いなんてないし、無駄な別れなんてない。

たとえ他の人みんながそれを否定しても、遼太は信じ続けた。

なぜなら、遼太自身が、様々な人と出会うことで、生きる勇気と力をくれたのだから。まだ大丈夫、まだ生きれる、そう思うことができたから遼太は病院生活をつづけられた。

だが、いよいよ限界が来た。

病院の遼太の個室では、様々な機械が遼太の体に取り付けられており、当の本人はひ

どく浅く小さな呼吸を繰り返して、意識はなくなりかけ、いつ命の灯が消えてもおかしくない状況になっていた。

体も呼吸に合わせて胸がわずかに上下するのみでまともに動かせず、眼もハイライトが失せて霞んで見える。

多くの医師たちが慌ただしく動き回り、両親が遼太のそばでそれぞれ必死に声をかけているが、遼太はそれに反応を返すだけの気力も体力もなくただただ天井を見つめる。いや、それすら意識してそうしているのではなく、体が動かせないが故にそう見えるのだが。

もともと、ここまで生きられたのも奇跡だったのである。

遼太にかけられていた余命は3年以上前に過ぎており、本来ならいつ死んでしまってもおかしくなかった。

それがここまでこの世に生きていられたのは紛れもなく「人とのつながりの力」というものだ。遼太は薄れゆく意識の中、心の底から確信することができた。

(…ごめんなさい。お母さん、お父さん。いっぱい迷惑かけて、なにも親孝行ができなくて、何も返すことができなくて。

…ごめんなさい、みんな。子どもたちには今度新しいマジック見せるって言ったのに

ね。おじさんたちにはまた麻雀打とうって言ったのにね。嘘ついちゃったね。

もし次があつたら、そのときは……)

灯が、意識が消える直前、もはや真つ暗で何も見えないはずの目に、暗闇の中に爛々と輝く一番星のような、強くて暖かい光が見えた気がした。

## 幼少期編（原作開始前）

### 第1局 自覚

転生しました。

いや、ネット小説とかでよくある神様に会って特典もらって異世界に転生とかではないから厳密に言えば違うのかもしれないけど。もしかしたらかつての記憶を持った魂の生まれ変わり…なんて思ってみたり。

それよりもずはこの世界でのぼくの状況を整理してみようと思う。そうしないところからちゃんとして生きていけないと思うから。

ぼくの名前は「向井遼太」、奇しくも思い出した記憶の僕と全く同じ名前だった。歳は3歳、どうりでこんなに小さいわけだね。

そして今いる場所なんだけど…何とビックリフランスだった。

ちなみにもっと詳しく言うとフランスにある病院の個室のベッドに座っている。

まああんな髪色と瞳だったから純粋な日本人だとは思ってなかったけど、祖母がフラ

ンス人の日本人クォーターみたい。おかげでかは分からないけどフランス語は読み書きもある程度分かるみたい。

誰かに聞いたわけではなく、知ってた”。

どうやらしっかりとこの世界で生きてきたぼくの記憶もある……というよりぼくが前世の僕の記憶や知識を思い出したって言ったほうが近いかも。

でも”ぼく”と”僕”とで全く変わらないものが一つあったのにはおどろいた。

それは、『人とのつながりを大事にしたい』って思ってたってこと。

身体年齢が3歳の子どもが何を言ってるのかって自分でも思うけどね。

多分理屈じゃないんだと思ってる。

なにか特別な理由があったわけじゃなくて、ただただ当たり前のようにそう思ってたし、言ってしまうえばそう思っていたことすら意識していなかった。

向井遼太という存在を形作る上での重要なアイデンティティ。

心のさらに奥、魂にまで刻み込まれた想いと願い。

だからこそ、”ぼく”と”僕”は同じ魂を持った存在なんだと思う。ちよつと厨二くさいかな？

話は変わってこの世界のことだ。



どうやらこの世界は21世紀、どうやら前世と大して変わらない時間らしい。

だが大きく違うことは、麻雀が老若男女に広く浸透した世界だということ。

並行世界パラレルワールドってことかな？小説ではファンタジー物のライトノベルとかも読んでたからちよつときめくものがあるかも。

世界の麻雀競技人口は1億人という大台を越しており、世界中でプロ・アマチュア問わず大規模な大会が毎年開催されている。

3 人家族のぼくの家にも自動の麻雀卓があることからその人気は押して知るべしだろう。

あと前世の僕の世界と違うところは……その……女性の貞操観念がおかしいんだ。間違いない。

まだぼくは3歳で身の回りの女性というのも親を除けば近所の人か一つ上の幼馴染しかいないから比較しきれない部分もあるけど、まずぼくに対する女性のスキンシップが激しい。

まあこれは今のぼくが自分で言うのもなんだけど子どもだから理解できる。男として見られてないってことだから。今思うところいろいろ恥ずかしいものはあるけど。

でも明らかに服装がおかしい！特に若い人！

スカートも短いし肌の露出が多い服を着た人がやけに多いので、一部の人に限っては

痴女か露出狂って言われてもおかしくないほどだ。

そしてなによりもそれを見た男性が特に何も思っていないように見えることが決定的である。

ぼくの記憶にある人は大体そうだったからこれがこの世界の常識なんだよね…僕の常識と違うからこれから大変そうだな…って悲観するしかないんだけど

そんなことを考えていると、ドアが開いて誰かが入ってくる。

「…！遼太！目が覚めたのね！」

「…おかあさん」

安堵した声で入ってきたのは気を失う直前で見た若々しく美しい女性。

遼太はこの人を知っていた。より正確にはこの世界の、という冠詞がつくが。

この女性は紛れもなく遼太の母親であり、遼太のあまりの様子から病院に連れてきたのである。

そしてその後ろにはもう一人、遼太よりわずかに背が高いくらいの女の子が目は大粒

の涙をためてこちらに走り寄ってきた。

「遼太くん！遼太くん!!!」

雀明華、それが彼女の名前である。

遼太と少し似ているシルバークレイの髪は走るごとに波打ち、涙をためたルビーを彷彿とさせる瞳もまた遼太のものと酷似しており、遠目から並んでみたら姉弟に見られることもあるが、二人の関係は家がある隣にある幼馴染である。

ただ明華の家は母子家庭であり、その母親も仕事上家にいないことがあるため、よく遼太の家に来ては寝食を共にすることも多かったので二人にとってお互いの存在はただの幼馴染では片付けられないほどの関係であるのだが。

そんな風に姉弟ではないが姉弟のように育てられてきた二人。

当然明華は心配するし不安になる、遼太も同じ立場だったら同様だっただろう。

「…おねえ、ちゃん」

「ひつく…こわかった…こわかったよお………」

「……ごめん、なさい。しんぱいかけて。もう、だいじょうぶだから」

遼太はそう言うのとゆつくりと明華を抱きしめる。

体が密着し、温かく柔らかい感触と、鼻腔をくすぐる女の子特有の甘い香りが遼太を気恥ずかしくさせ自然と顔が赤くなるが、それでも明華を放すことなく苦しくならない程度にさらに抱きしめる力を強める。

明華から「んっ…」とわずかに声が漏れる。

遼太は明華の頭をゆつくり撫でながら、安心させるように言葉を紡ぐ。

「だいじょうぶ…ぼくは、ここににいるから。」

「……………うん……………うん……………」

明華は泣きながらもその顔にはたしかな笑顔があつた。

遼太の母から事の顛末を聞いたときは幼いながら生きた気がしなかつたと思つていた。

家族みたいに大切に想っている彼は、一人で寂しいときにいつも一緒にいてくれた。声をかけてくれた。

明華に、暖かさをくれた。

だからこそまた一人になるのかとどうしようもない不安に駆られて、遼太の母の車と一緒に乗って病院に急行して、病室で遼太を見つけたときはいろんな感情が爆発して何も考えられなかった。

ただただ遼太に触れたくて、その暖かさを感じたくて、声を聴きたくて、そんな純粋な願いや思いだけが頭を支配した。

遼太はそれに応えてくれた、抱きしめてくれて、暖かさをくれて、たまっていた不安を一瞬で吹き飛ばしてしまうくらい優しく声をかけて安心させてくれた。

——…だいきき…！

このとき明華が遼太に抱いた想いが家族に向けるものではなく一人の男の子に向けたものということに気づくのは、もう少しだけ後の話である。

## 第2局 能力

前世を思い出してから3年、ぼくは6歳になっていた。

あの後なんとか落ち着いたぼくたちはやってきた医師たちに話を聞き、どこにも異常はないということでその日のうちに退院となった。

もともとぼくが気絶した原因も二人の向井遼太の意識と記憶が混ざって脳がパニックを起こしたからであり、ぼく自身もあれから症状が出ることもなかったので問題も起こらなかった。

それからは特に何かあるわけでもなく時間が過ぎていったんだけど、一つ変わったことがある。

「遼太くん！」

「わっ!?!明華おねえちゃん！」

声が聞こえたかと思うと、後ろから衝撃が来て、胸に腕を回して明華おねえちゃんが抱き着いてきた。

そう、明華おねえちゃんがあの時以来スキンシップが激しくなったのだ。

いや、前から割とスキンシップはとられていたんだけどあの日以降は拍車をかけて激しくなっている。

同時に明華おねえちゃんと一緒にいる時間が長くなった。

それも明華おねえちゃんの母親がいないときはずっと言っていていくらいに。

どうにも契機があの日からなのだが理由が分からない。

またあんなことにならないように見ているって感じなのかな？

正直に言うと、恥ずかしいの一言に尽きる。

ぼくは前世を思い出したとはいえまだ子どもで、しかも体の年齢に引つ張られて精神年齢も下がってる気がする。はつきりとは分からないけど。

でもそれを抜きにしても明華おねえちゃんは掛け値なしに可愛いと思う。

体のパーツの一つ一つが整っていて、爛々と煌めく綺麗なルビーの瞳は目が合うたびに惹き込まれそうになる。

将来は間違いなく美人になると明華おねえちゃんを見ていったのはおかあさんだけでなく、ぼくも素直にそう思えるし、明華おねえちゃん的笑顔に見惚れてしまったことも一度や二度ではなかった。

それに性格だって、純真無垢で仕事でいないことも多い母親に対しても泣きごとを言

わずいっただって優しい。そんな優しさにほくも、おかあさんも、明華おねえちゃんの母親も助けられてきた。

…だからこそ、こうして抱き着かれている現状は恥ずかしくもあり、同時に嬉しくもあるのだが。

あと、明華おねえちゃんを名前呼びにしているのはこれもまたあの後から明華おねえちゃんに言われたことで

「あの、遼太くん」

「おねえちゃん？どうしたの？」

「えっと、これからわたしのことは…なまえでよんでほしいかなって」

「…え、なまえで？」

「うん！だめ…かな？」

「…うん、わかった。それじゃあ明華おねえちゃん、だね」

っていう経緯からなんだけど、呼び始めてから明華おねえちゃんの笑顔が増えた気がする。



本人が喜んでくれてるならいい…のかな？

「ねえ遼太くん！」

明華おねえちゃんは回した腕はそのまま肩越しにこっちをのぞき込む。

この態勢だと必然的に二人の顔が至近距離になるんだけど多分そんなこと気にして  
るのはぼくだけなんだろうなあ…

「マージャンしよう！」

ちなみにぼくたちの最近の遊びはもっぱら麻雀だったりします。

「ツモ！立直、ツモ、混一、白、ドラ3で4000・8000！」

「あら。」

「また遼太くんのあがりだね！」

「あたた、親つかぶり。」

遼太は意気揚々と点棒を受け取る。

今の面子は上から遼太、遼太の母親、明華、明華の母親で、順位もそのままその順番で遼太が4万点オーバーでトップを走っている。

しかしそれも2位と3位との差はさほどなく、3位の明華も遼太への親満直撃で十分ひっくり返る点差である。

今の局は南三局、今回の対局は半荘戦で行っているため次がオーラスになる。

ジャツ、と小気味いい音とともに牌山が現れ、配牌が行われる。

オーラスの親は明華、そして配牌が終わると、どこからともなく緩やかに風が吹き始め、それが明華に集まり服や髪をなびかせる。

それを見た他の3人は、来たか、と同時にその風の正体に感づく。

今いる場所は室内、しかも開いている窓や扉はなく普通に考えて風なんて入ってくるはずがないのだが、3人はそれに動揺も困惑もすることはなかったのは何故か。

こうなる可能性があったことを”知っていたから”である。

——雀明華は風を引き寄せる

それは遼太たちの中では今や不変の共通認識だ。

いきなりなに意味の分からないことを言ってるのかって思うけどこれは本当のことである。

この世界には普通の常識の埒外にある超能力やオカルトとも呼ぶべき力が存在する。

その最たる例が遼太の目の前にいる後に世間から『ザアントール風神』と呼ばれるこの雀明華だ。明華には普段からどこにいても風を呼び込む不思議な性質を持っていた。

それが麻雀の対局中に起こると、配牌の時点で明華の手配に自風牌が集まるのである。

攻撃、防御、スピード、火力と様々な状況に対応できる明華のこの能力はかなり強い部類に入るだろう。

そのほかにも麻雀の国際大会、特に女性では稀にそういった能力のようなものを行使している人も見かけることもある。

この世界は前世の遼太の世界とはまるで違う世界であると、遼太は改めて実感していた。

(案の定、(東)は手牌になし：普通なら別に疑問すら持たないけど、今は…)

手配を見て明華の自風牌である(東)がないことを確認した遼太はチラリと明華を見る。

未ださらさらと揺れるシルバークレイの髪から覗く目が遼太の目と合う。

目が合った明華は満面の笑みを向ける。

それを見た遼太も微笑で返すがその顔は僅かに赤くなっており、少なからず明華に惹かれている自分がいる事実を認識させられる。

そんな中でもオーラス、南四局ははじまり、親の明華からツモっていく。

そして六巡目、

「ツモ！2000オール。」

対面の明華から声が響き、手牌が広げられる。

その手はしつかりと〔東〕が3枚組みこまれた良形3面張でのアガリ。

さすがに速い、と遼太が改めて明華の実力を認識しつつ、場は一本場。

遼太の手牌は二向聴、しかも手牌に幺九牌が一つのみ、現在トップの遼太は何をあがっても勝ちなので喰いタンの方針に決めると唯一の幺九牌を打牌する。

「ポン！」

3巡目、下家の明華の母親から出た〔六〕を鳴いて遼太は聴牌をとる。

役は喰いタンのみ、〔二筒〕〔五筒〕の両面待ちをとった遼太は卓上と他家を見据える。

上家、下家の大人組は聴牌気配はなくまだ手も遠そうだが、問題は対面の明華。

聴牌こそまだしていなさそうだが、明華の手牌から感じるプレッシャーがかなり大きい。

場には〔東〕どころか場風の〔南〕を含めた風牌が一つも見えていないため、これをもし明華がすべて集めはじめているとしたら軽く役満クラス、たとえツモられても他家からの出アガリでも確実にまくられてしまうだろう。

——先にアがる！

より思考が前傾になった遼太は口角をあげて打牌する。

そのまま明華の母親、明華、遼太の母親と回っていき、遼太は山牌からツモるが、きた牌は〔北〕。

一瞬間をしかめるが、そのままツモ切りした北に对面の明華が反応する。

「遼太くん、それポン！」

明華が〔北〕を鳴いた瞬間、明華の手牌のプレッシャーが段違いに増した。

遼太は本能的に明華が聴牌したことを察した。

それも、おそらく役は小四喜か大四喜。

明華の能力は現状自風牌のみを集める能力のはずなのだが、能力がどうのこうので言っても意味はないし、言ったところで現実は変わらない。

ならば信じるは自分自身の運、それだけだ。

遼太の運が上で逃げ切るか、明華の運が上でまくられるか。

その結果は…

「むー…」

「えっと、ごめんね？明華おねえちゃん」

対局が終わった後、ぼくは明華おねえちゃんのご機嫌をとっていた。

これだけで大体の結果は分かっただと思うけど、最終的にトップはぼく。

あの後、明華おねえちゃんが捨てた牌がちょうど「五筒」でそれをぼくが和了って終

局となった。

明華おねえちゃんの手牌はやはりというべきか小四喜聴牌の〔六筒〕〔九筒〕待ち。

しかも山を確認したら次の明華おねえちゃんのツモで〔九筒〕がつかめていたみたいで本当にギリギリでの勝利だった。

とまあ、ここまでギリギリだったからこそ明華おねえちゃんが頬を膨らませながらこちらから目をそむけているわけなんだけど…

「明華おねえちゃん…」

「プイッ！」

「あ、こんどおかしつくるから！」

「プイッ！」

「え〜つと、じゃあぼくにできることならなんでもするから！」

「……………」

「あの、明華おねえちゃん…?」

「……………て」

「へ…………?」

「きょうからいつしゅうかん、いつしよにねて…」



「え!?それは…」

「なんでもするっていった!」

明華おねえちゃんは顔を近づけながらそう言う。

「あら、だつたら枕の準備しないとね」

「おかあさん!」

「それなら家から着替えを持ってこないかね」

「おばさんも!」

大人組二人がニヤニヤしながらトントン拍子で話が進んでいく。

お母さんはなんとなく分かるけどおばさんの方はそれでいいんだろうか…?

一応ぼく男なんだけど…あ、ここっていわゆる男女逆転した世界の上にぼくたちはまだ子どもだからか。

「えっと、おばさん…」

「ん、どうしたの遼太くん?」

「あ、…いちおうぼくおとこなんだけど…」

「あら、大丈夫よ二人なら。なんなら明華のこともらつてくれるとウチとしては安泰な  
んだけど？」

味方なんていなかった。

いや、決して嫌なわけではないんだけど…

「遼太くん、いやだったかな…？」

「！」

明華おねえちゃんはそう言うはずかにうるんだ瞳でぼくを見上げる。

分かつてやってる…わけないよね。

そういうことができる性格じゃないのはなによりぼくが一番知ってる。

明華おねえちゃんは純粹に思ったことを言っているだけ。

その言葉には余計な考えは何もない。

そう、3年前…いや、”ぼく”の記憶の中にあるそれ以前の頃から変わってない。

そんな心が、ぼくにとっては羨ましくて…そんなところに一番惹かれたのかも…ね。

「ううん、いやじゃないよ。…いつしよに、だね」  
「…うん!!」

そのとき見せた明華おねえちゃんの笑顔は向日葵のようで、眩しいほどだった。

「イヤっ!!そんなのイヤだよ!!!」

「明華、遼太くんも困ってるでしょ。」

「イヤあ!!!」

だからこそ、こうしてぼくに抱きついて離さず泣いてる明華おねえちゃんを見ると、どうしようもなく自分の心に雨が降ってるかのようになつてしまふ。

時間をさかのぼることほんの少し前、2月も終わり春が近づいてきたころ。もはやいつもの4人が集まった中で重い口を開いたのはおかあさんだった。

「私と遼太は、日本に行くことになりました」

「……………」

「えっ……………」

「…そうですね。それは、寂しくなりますね」

理由はおとうさんの仕事の都合。

おかあさんからウチが転勤族ということは聞いていたし、今回の件については決して驚きはしなかった。

むしろ6年以上というのはかなり長い方だったらしく、これからは基本的に3年周期で引越しになるらしい。本拠地を日本に置くのでこれからは日本国内を転々とする

といった具合になるんだとか。

正直に言つて3年周期云々は割とどうでもよかつた。

ぼくにとって大事だったのは、もうフランスに住むことができないということ、それはすなわち、明華おねえちゃんとの別れだという事実だ。

仕方がないということは分かっているし、別に一生の別れというわけでもない。

それでも、ぼくにとつて明華おねえちゃんは、大事な家族で、どこか惹かれていた女の子で、そしてこの世界で親以外のはじめてのつながりを持った人。

そう簡単に割り切れるほどの存在ではなくなっていたんだ。

「おわかれなんてイヤだよ!!!」

すでに頬に大きな雫を流している明華おねえちゃんがめいっばいの力で抱きついてきた。

当然ぼくだつてお別れなんてイヤだ。

でもそれはもうぼくたちの力ではどうしようもない。

だからこそ、別れは告げないといけない。

「…明華おねえちゃん」

「…遼太、くん…?」

「ぼくたちは、いかなくちやいけない。明華おねえちゃんとは、いままでみたいにはあえなくなる」

「!イヤツ!!もうあえないなんて…」

「だから!」

でもこれは、ただのお別れの言葉じゃない。

「だから、またぜったいにおおう。やくそく!」

「…遼太くん」

ぼくはそう言葉を締めると明華おねえちゃんの首にあるものをかける。

その正体は羽根の形をした銀のネックレス。

引っ越しの話を聞いてからおかあさんに頼み込んで買ってもらったものだ。

これは、再開の約束。

これは、ぼくと明華おねえちゃんをつなぐための誓い。

ぼくは右手の小指を明華おねえちゃんに向ける。

明華おねえちゃんは未だに涙を流しながらもぼくが向けた小指に目を向ける。そして、自分の右手をゆっくり差し出すとその小指をぼくの絡めた。

「やくそくだよ…やぶったらゆるさないからね！」

「うん、やくそく！」

そう約束した二人は、笑っていた。

## 第3局 巫女

霧島神境。

鹿児島の山中深くに、女仙だけが住む仙境が存在する。

しかしそれを知っているものは数少ない。

噂を嗅ぎつけ霧島神境を探し出そうとした者もいたらしいが、たとえいくら探そうとも目に見ることすらもかなわなかったという。

例えるなら存在自体が霧のように、どこをどれだけ探そうとも捉えられた者はいない。

誰に聞いてもその所在を知る者はいない。

故に霧島神境はその秘匿性をもって一般には知られることなく、もはや一種の御伽噺として伝わっている。

そんな霧島神境の入り口を、向井遼太とその母がくぐろうとしていた。



フランスの地から旅立ち、ぼくたちが足を踏み入れたのは鹿児島だった。

初日は新しく住む家に行って東の間の団欒を楽しんだが、翌日になるとおとうさんは早朝から職場へ向かい、ぼくとおかあさんはとある山に向かうことになった。

何故いきなり山だと思っておかあさんに聞いてみたら、おかあさんは何と云えばいいのかといった顔をしながら返してきた。

曰く、今向かっているのは山中にある『霧島神境』という場所である。

曰く、霧島神境は女仙だけが住んでおり、そこには『本家』と『分家』が存在し、神

境における『特別な力』を女仙が有している。

曰く、おかあさんはその本家の血筋であり、ぼくにもその力があるということ。

今回は、ぼくの力を調べるためらしいが、今後定期的に神境に赴いてその力を制御するための修行を行わなければいけないらしい。

下手したら泊まり込みでしなければいけない修行もあるんだとか…。

「ごめんね遼太。こんな力を持たせてあなたを縛ることになってしまった…」

おかあさんはそう謝ってくれたが、ぼくとしては正直に言うと『特別な力』やそれを制御するための修行などについては文句はなかった。

もう持つってしまった力は仕方ないことだし、それを血筋のせいなどおかあさんに当たるなんてもつての外。

大事なものは、そういう他の人とは違う部分を持ったうえでこれからをどうやって前向きに生きていくかということだとぼくは思っている。

———こう思えるのも、前世のことがあったからなんだろうな…

想起するのは前世のときの記憶。

物心つく前から始まった病院生活。

テレビなどで見る外を走り回る同世代の子どもを見て、自分が普通ではないと気付くのにさほど時間はかからず、親に理不尽な怒りをぶつけたこともあった。

どうしてぼくはあの人たちみたいに外で誰かと遊べないのかと、どうして普通の体で産んでくれなかったのかと。

今でこそ荒唐無稽な話だと言えるが、当時のぼくはそんな感情を誰かにぶつけることしかできなかった。

それに対しておかあさんとおとうさんが返したのは優しい抱擁と涙を浮かべての謝罪だった。

ごめんね…と、遼太の気持ちに気づけなくてすまない…と。それからだった。

積極的に部屋から抜け出して他の人と遊ぶようになったのは。

ぼくはもうテレビの向こうの人たちみたいに走り回って誰かと遊ぶことはできない。そんな叶わぬ願いを望んで、二人を泣かせることになった。

ならせめて今ここでできることで、自分がしたいと思うことをしようと決めた。

それが、ぼくが笑って過ごすことが、おかあさんとおとうさんの笑顔になるからと、そ

う二人が教えてくれたから。

おかあさんとおとうさんの涙を見て、二人には笑ってほしいと、幼いながら欠陥を抱えたぼくが心から願ったことだから。

——こんなときに：いや、こんな時だから思い出したのかな。

我に返った遼太はクスリと笑う。

そうして改めて前を見てみると、もうずいぶんと階段を登ったのか終わりが見えはじめ、奥には大きな鳥居がそびえ立っていた。

そして長い階段を登り切った先には老齡の女性と遼太より少し上くらいの幼い少女の巫女服姿の二人が鳥居の下で立っていた。

「久しぶりですね、待っていましたよ。」

「ええ、お久しぶりです。」

「して、そちらの子が……」

「あ、はじめまして。向井遼太、6さいです。よろしくおねがいします。」

「はじめまして。礼儀正しい子ね。私は君のお母さんの師匠兼従者みたいなものです。そしてこっちにいるのは」

「はじめまして、石戸霞です。歳は8歳です。」

「ここでの案内は今後霞が行います。霞、彼のことは頼みます。私たちは別室で話すことがありますので。」

「遼太、そういうことだから。後でまた合流するからね。」

そう言うと大人組の2人は行ってしまふ。

「…遼太さん。それじゃあ私たちも行きましょうか。」

「あ、はい。わかりました。」

霞に先導され、遼太も神境の中に足を踏み入れる。

その道中、遼太はある疑問を投げかけた。

「あの、石戸さん。これからなにをされるんですか?」

「これからは遼太さんの力を調べます。その後は私たち分家の六女仙と小蒔ちゃん…本

家の姫様と会っていただきます。」

「そうなんですネ。…えつと、ぼくのほうがとしたのでけいごはいいですよ？それ  
にこれからもあうことになるのにきよりがあるのはイヤですし。あ、それがふだんのは  
なしかたならむりじいはできませんけど…」

「…分かったわ。そういうことならこれからは遼太くんと呼ぶわね。」

「はい！ありがとうございます！」

「クスツ、遼太くんは敬語のままなのかしら？」

「へ？でもとしようですか…！」

「このままじゃ遼太くんと距離があるままになるかもしれないわね〜」

うつ、と自分が言った言葉をそのまま返されて遼太は言葉に詰まる。

自分が言った手前それに反論することもできず、さらには自分のお願いを聞いても  
らってこちらが聞かないというのも不誠実だと思った遼太は観念したような顔で霞に  
向き直る。

「…うん、わかったよ石戸さん。」

「霞、でいいわよ。」

「……………霞さん。」

「はい、改めてよろしくね、遼太くん。」

「よろしく……………霞さん。」

とつさに敬語が出そうになった口をギリギリで閉じ、改めて挨拶を交わす。

そうこうしているうちに建物に着いた。ぼくたちはそのまま中に入り、霞さんが指定した部屋でぼくの力を調べるようになった。

といつてもぼく自体は何かするわけではなく、霞さんから少しの間そのまま座っているようにと指示され、それからものの数分で調べ終わったらしく、解放された。ぼくは再び霞さんを先頭に建物内を進んでいく。

少し歩いて広間の近くまでくると、奥から数人の少女の話し声とジャラジャラという何かがぶつかりあう音が聞こえてきた。

「?霞さん、このおとつて…」

「ええ、多分遼太くんの予想どおりだと思っわ。もうみんな揃ってるみたいね。」

霞さんはゆっくりと広間につながる障子を開けると中に入っていく、ぼくもそれに続

いた。

中にいたのは霞さんと同じ巫女服を着た少女が4人、一つの雀卓を囲むように座っていた。

ぼくたちが入ってきたことに気づいたのか、4人は手を止めるとこちらに向き直り声をかける。

「霞さん、おかえりなさい。」

「おつかれさまですよー。」

「おかえり。」

「霞ちゃん、おつかれさま。」

「ええ、ありがとう、みんな。」

そうして会話を区切ると、4人はぼくの方を物珍しい目で見る。

まあぼくは顔の造形自体は日本人に近いけど髪と眼は明らかに外国のそれだし、なによりこの霧島神境は女仙だけが住むとされる仙境、男を見ること自体があまりなかったんだろうなと思いつつペコリと一礼してから自己紹介をはじめ。



「はじめまして。向井遼太です。これからよろしくおねがいます。」

「狩宿巴です。よろしくおねがいますね。」

「薄墨初美です。よろしくですよ。」

「滝見春。よろしく。」

「えっと、神代小蒔…です。よろしくおねがいます…」

「二つ紹介を加えると、小蒔ちゃんがこの中で唯一の『本家』の血筋でこの霧島神境の姫様。そして私たち『分家』の4人と後2人を加えて『六女仙』なのよ。」

4人もそれぞれ順番に遼太に向かって自己紹介を行う。

上から順番に赤茶色の長い髪をポニーテールにしてこの中で唯一眼鏡をかけている少女、狩宿巴。

巴と似た髪をツーサイドアップにして語尾がよく伸びている少女、薄墨初美。初美だけ巫女服の着方が違い、袖をブカブカにして胸元がかなり開いており、袴がミニスカートばりに短くなっている。

深緑のような髪をロールのかかったポニーテールにして感情の起伏が少ない少女、滝見春。

最後に艶のある黒髪をおさげにして、緊張しているのかときどき詰まりながら話す少

女、神代小蒔。

「歳は初美ちゃんと巴ちゃんが私と同じ、小蒔ちゃんがその一つ下、春ちゃんが二つ下で遼太くんと同じね。」

「年下だったんですかー。」

「そうですね、なんとなく雰囲気からもう少し上かと…」

「あはは…。ぼくのほうがとししたなのでよかったですらきがるにせっしてくれとうれしいです。」

「わかったのですよー。なら遼太も私のことを名前で呼んでほしいのですよー。」

「そうね、私もそうしてもらおうかしら。」

「わたしも、春でいい。」

「私も…姫とかじゃなくてみんなと同じように名前で呼んでください」

「…はい、わかりました。初美さん、巴さん、春さん、小蒔さん。」

そうして、遼太と5人の巫女が邂逅した。

## 第4局 開花

全員の自己紹介が一区切りつくと、何か思いついたのか霞がポントと手をたたく。

「そうだね。せっかく雀卓もあるんだし遼太くんとの交流ついでに対局してみましようか。」

「あ、そういえばみなさんもマージャンできるんですね。」

「ええ、力の制御をする修行の一環としてね。」

「遼太もできる…?」

「はい、だいじょうぶですよ。」

「ならよかったですよー。」

やることが決まったのはいいが、ここにいるのはぼくを含めて6人。

最終的に巴さんと小蒔さんが見学になり、雀卓についたぼくの後ろに座った。

あまり長い時間はできないので、今回行うのは東風戦、つまり東一局から東四局の4局で終わる形式である。

ちなみに席は親が初美さん、それから順に霞さん、春さん、ぼくという並びになった。配牌が終わってまずは東一局、ぼくは北家ではじまった。

「ツモ。2000・4000ね。」

東一局、最初に上がったのは霞で満貫のツモ和了り。

場は切り替わり、霞が親、そして、初美が北家での東二局が始まった。

「……ん？なんだろう、この雰囲気……」

違和感に気づいたのは東二局が始まってすぐだった。

霞さんと春さんがやけに初美さんを注視している。

といつても普通の人から見たらほんの微々たる差だろうが、対局相手のことをよく見ていたぼくには割とすぐ気づくことができた。

ぼくにとつては対局中の相手の観察というのは麻雀において重要なファクターだと思っている。

なにも相手のことを見るというのは相手の視線だけに限らない。

ツモった牌を見たときの相手の表情、打牌や理牌のクセ、得意としている戦術や役、それらを行うための必然的行動などなど、他にも挙げればあるが、全てとはいかずとも相手を見てそれらを見抜くことができたなら、それは対局において相手よりも優位に立つための要素となりうる。

まあまだ東二局のはじめという段階で分かっていることなんてほとんどないのだが、少なくとも分かっているのは、この東二局、大きく動くのは間違いなく初美さんだということだ。

特定の条件のときだけ警戒しているということは明華おねえちゃんみたいなオカルト持ちの可能性も十分にある。

———どういう能力かは分からないけど、この局の初美さんは要警戒！

そう考えながらぼくの番が来て山牌からツモる。

少しだけ逡巡して、切った牌は〔北〕。  
瞬間、初美さんの口角が上がった。

「ポン！」

「！」

ぼくが〔北〕を切った瞬間に初美さんに鳴かれる。

タイムラグが全くなかったから、おそらく〔北〕がきたら元から鳴くつもりだったのか。

警戒していた初美さんが行動したことで一瞬動揺したが、すぐに表情を戻す。

初美さんの手牌から感じるプレッシャーは弱い、おそらくまだ聴牌すらしていないはず。

…無意識に使っていたけど、ぼくのこれもオカルトの一種なのかな…？

手牌から感じるプレッシャーでおおよその聴牌気配が分かる、この世界に来てから全く意識せず自然に使ってたけど、よくよく考えれば十分これもオカルトだよ、前世ではこんなことできなかつたし。

「それもポンですよー!」

「あら。」

「……」

数巡後、僕が切った〔東〕を初美さんが再び鳴いた。

そしてここで反応したのが霞さんと春さん、まあ春さんに関してはずかには視線を初美さんに向けて少し眉をひそめたくらいだったけど。

前から初美さんと対局している二人ならどういう能力かは知っているはず。

あくまで推測に過ぎないが、一回目の〔北〕ではなく二回目の〔東〕で反応したということはこの二つを鳴くこと、もしくは〔東〕を鳴くことで発動する能力だと一応の仮定はできる。

……一回目に鳴く直前に初美さんの口角が上がったから前者の可能性が高いか……?

どちらにしても逆に言えばこれでおそらく能力発動の条件が整ってしまったとも仮定できてしまうわけだけど。

その証拠に初美さんはさつきよりも笑みを浮かべているし、霞さんと春さんはより警戒を強めている。

そして巡を追うごとに初美さんの手牌から感じるプレッシャーが桁違いに上がっていくのを感じる。

ここまでの圧力はあの時の明華おねえちゃんと同じくらいだ。

つまりは役満クラス、しかも今の初美さんのツモで、感じた限りもう聴牌までいつている。

そしてここにきて動いたのは意外にも春さんだった。

「ポン。」

「チー。」

ここにきての二副露、初美さんと幾度も対局している二人なら今がどういう状況かも知っているはず。

副露するということは順子や刻子を早く作れるが、それだけ手牌を晒すと同時に自由のできる牌が少なくなり危険牌を出す可能性が高くなる。

すなわち、攻めには使えど防御や逃げの場合で使うことは基本的にまずない。

そう思つて春さんを見るとちようど目が合う。

——…なるほど、ね。



春さんがやろうとしていることを察したぼくは春さんの捨牌と副露を再確認する。  
そして、牌を切る。

「ポン。」

予想どおり。

なら、ここで切るのは…

「ロン。3900。」

「はい。」

ぼくが春さんに振り込み、点棒を渡す。

ただぼくにとってはこれは想定していたことだった、いや、ドラが絡まって予想より痛かったけど。

さっきの春さんの和了りはぼくとのコンビプレーである。

春さんと目があつた後、春さんの聴牌気配を見てみたら感じるプレッシャーこそ小さかったが既に聴牌に近い感じだった。

捨牌と副露を再確認して狙いが読めたからワザと放銃したのだ。

まあ頭にドラが被って少し痛かったけど、役満をくろうよりは安い代償だろう。

初美さんを見てみると、分かりやすくむくれていた。

気持ちは分かるがこれも勝負、気を取り直して東三局に入っていた。

「あら、ツモ。1300・2600。」

この局の和了りはまた霞だった。

遼太は東一局からこの東三局までツモの調子が全くと言っていいほど上がらず先に和了られる結果に。

それでも幾度もつかまされた危険牌を切らず霞からの出和了りをかわしたのはさすがといったところか。

現在オーラスを残して点数は次のようになった。

霞	38200
春	24300
初美	19700

遼太 17800

春さんに振り込んだのは承知の上だから仕方ないけど、それ以外でもツモ和了りで削られてここまで毎局点数を落としている。

トツプの霞さんとの点差は実に20000点オーバー。

オーラスはぼくが親だから満貫直撃、親跳ツモで一発逆転、連荘すればその限りではないけど。

でもここまでツモの調子はかなり悪い。

このままなら先に和了られて負けるのは自明の理。

——負けたくない！

遼太がそう強く思った瞬間、

ヒュウウウツ——

外気から隔絶されているはずのこの部屋に、風が吹き始めた。

「……………！」

「風、ですかー？」

「神の力とは違う……………これは…？」

突然吹き始めた風は徐々に指向性を持って遼太の周りに集まりだし、白銀の髪や、服を静かに揺らす。

小蒔や六女仙の面々が困惑の表情を隠せないなか、遼太は驚きの中に心地よい感情が溢れ出し、かすかに笑顔を浮かべてその風を感じ取っていた。

「……………明華おねえちゃん…！」

これは、遼太と明華との一つの絆の形。

『人とのつながりを大切にする』

魂に刻み込まれた遼太の想いと願い。

そしてそれと同じくらい遼太のことを想った明華。

そんな二人の間だからこそ発現した奇跡。

誰に言われるでもなく、まるで天啓が舞い降りたように遼太は自分に起こった奇跡を理解した。

絆を深めた者と同質の能力を得る能力。

言葉にするなら遼太が得たオカルト能力はそう呼べるものだろう。

同質といっても全く同じものではなく、よりその能力を昇華させたものなのだが。

まるで遼太のためにあるような力。

いや、遼太がああな想いと願いを心から信じていたからこそこの能力が発現したのだろう。

嬉しくなった。

オカルト能力を得たことじゃない。

『人とのつながり』は本当に誰かの力になるのだと、たしかな形としてこの能力が証明してくれたように感じたから。

自分が信じたことは、この世界でも間違いはなかったのだと、そう言ってくれたかのように思えたから。

「さあ、いこう…明華おねえちゃん。」

風を纏った遼太は、そう言うのと閉じていたルビーの瞳をゆつくり開く。  
その瞬間、一筋の雷光が瞳を走った。

そしていよいよ始まった東四局<sup>オーラス</sup>。

配牌が終わり遼太は自分の手牌を見る。

もうほとんど確信してたのか遼太は顔に出すことはなかったが、それを見て後ろで見ていた巴と小蒔がわずかに息を呑む。

(これは、偶然……?)

(いえ、違う……)

遼太の手牌にあつたのは遼太の自風牌であり場風牌でもある(東)が3枚。

普通ならただの偶然で済ませるものだが、先程のあの現象を見た後の二人ではどうしても関連性があると思わざるを得なかった。

遼太に起きた現象に加えて、そんな二人の様子を見たのか対局している3人も遼太に對する警戒を強める。

遼太たちのいる広間には風がなびく音と牌同士がぶつかる音のみが響く。

勝負が決したのは10巡目。

風が、よりいっそう強く吹き荒れた。

「カン！」

「……なんて力……」

「まるで嵐……」

遼太の手牌から晒されたのは4枚の〔東〕。

王牌からとった牌を確認すると、吹き荒れる風とは裏腹にトンツと優しくその牌を置き手牌を開く。

「ツモ！嶺上開花、自摸、三暗刻、混一、ダブ東。8000オール！」

親倍をツモって遼太の逆転一位で対局は終了となった。

遼太はフウツ、つと一つ息をつくと未だに啞然としてる小蒔たちに向かって一礼した。

「ありがとうございました！」

「！ええ、お疲れ様。」

「おつかれですよー。」

「おつかれ……」

最初に我に返った霞を皮切りに対局していた3人もそれぞれ挨拶を交わす。



そろそろ遼太が帰る時間が近づいてきたので後ろで見学していた巴と小蒔も輪に加わって雀卓を片付け始める。

そしてちょうど片付けが終わったタイミングで先に別れた遼太の母親と老齡の女性が広間に入ってきた。

「遼太、おまたせ。」

「おかあさん。」

「顔合わせは済んだみたいですね。」

「はい、だいじょうぶです。」

「うん。それじゃあ私たちは帰りましょうか。」

遼太は立ち上がると母親の元に向かう。

そして最後に霞たちの方を振り向くと、それぞれ違いはあれどみな一様に名残惜しそうな表情をしていた。

それを見て遼太は彼女たちと同様にせつかくできた新しいつながりの人たちと別れる名残惜しい気持ちになり、同時にそう思ってくれているのだと嬉しい気持ちにもなった。

「きょうは、おわかれですね。」

「そうね、少し寂しいものだけど……」

「六女仙のみんな以外で同世代の人とせつかく知り合えたのに……  
もつといろんなお話したかったですよー。」

それは当然遼太も同じ気持ちだ。

だからこそ、ここの言葉を紡ぐ。

「でも、またあえますから！」

「!……そうよね。また会えるわ。」

「ん、定期的にくるって聞いてた。」

「はい!だから、またこんど、です！」

「はい、また今度ですね！」

「楽しみにしてるわね。」

そう会話を締めると、今度こそ笑顔で遼太たちは別れていった。

## 第5局 敬慕

鹿児島に来て、霧島神境のみんなと知り合ってから二年が過ぎた今日この頃、小学3年生になったぼくこと向井遼太はいい加減慣れた足つきで霧島神境へ続く階段を上っていた。

初めて顔合わせをしたあの日から、おおよそ二日に一回のペースで神境へ赴き、小蔭さんや六女仙のみんなとは別メニューで修行を行った。

みんなは物心ついたところから修行は行われていたらしく、はじめたばかりのぼくとは適切な修行の量や質が違うんだとか。

はじめたばかりのぼくがやることは、『力』とはなんなのか、どのようなものなのか、どうやったら引き出せるのかといった、『力』そのものを知るところから始まった。

まあ聞いた話では男で『力』を持った人は過去にいなかったみたいだから、神境側もぼくの扱いについては難儀してるみたい。

そして、もちろん修行だけではなく、合間の時間や終わった後の時間を使って小蔭さんと親交を深めることも多かった。

麻雀で遊ぶこともあれば、お互いの学校での出来事について話すこともあった。ぼくにとって神道系の学校に通っている彼女たちの話は新鮮だし、霧島神境以外での彼女たちを知れるというのが嬉しかった。

それはみんなも同じだったようで、興味深そうにぼくの話すことを聞いていた。

そして、この2年のなかで新しい出会いもあった。

「はじめまして、石戸明星です！」

「は、はじめまして……十曾湧です……」

霧島神境の六女仙残りの二人。

霞さんからの紹介で二回目に霧島神境に来た時に初めての顔合わせになった。

ぼくより背が低く、霞さんとよく似た少女、石戸明星。名字も霞さんと同じだったので気になって聞いてみたらどうやら従妹の関係らしい。

ブラックグレーの髪を一部だけ後ろにまとめたような髪型をした少女、十曾湧。

歳は二人ともぼくよりひとつ年下みたいで、呼び方は「明星ちゃん」「湧ちゃん」で落ち着いた。

二人の印象は正反対で明星ちゃんは快活で積極的、湧ちゃんはおとなしく消極的といった感じだ。

積極的に話しかけてきてくれた明星ちゃんはすぐ仲良くできたが、湧ちゃんは初日ですぐ仲良く、というところまではいかなかった。

どうやら聞いたところ同世代の男を見るのは初めてらしく、加えて引つ込み思案な性格から初日はずっと明星ちゃんの後ろに隠れて顔だけ出してこちらの様子をうかがっていた。

別にそれが悲しいわけではなかった。

こちらから声をかければすぐに明星ちゃんの後ろに隠れてしまうが、逃げ出したりはしなかった。

それから少しして明星ちゃんの背中から顔をのぞかせると、申し訳なさそうな顔でこちらを見ていた。

それだけで、ぼくを嫌ってるわけじゃないと、おっかなびっくりながらも自分からこちらへ歩み寄ろうとしてくれていている気持ちがあることは言葉にするでもなく伝わってきたから。

だからこそ、そこから湧ちゃんと仲良くなれるまで長い時間はかからなかった。

ぼくがしたことなんてせいぜいきっかけを作ることくらいだったけど、それで十分

だった。

自分から近づこうとしている人にこっちから距離を詰めるのは逆効果になることもあるというのは前世の子どもたちで体感したことだったから、ぼくがしたのは湧ちゃんが話しかけやすいような環境を作ることだけ。

その様子を見ていたみんなから「なんだかお兄ちゃんみたい。」という謎の評価をうけて、後に本当に明星ちゃんも加えた2人からそう呼ばれるようになったのは…まあイヤではないし今更何か言うこともないだろう。

なんて思い返すのも束の間、いつもながらに長い階段を登り終えてその先に待っていたのは、ぼくにとってはもう見慣れた人物だった。

「小蒔さん！」

「あ、遼太くん！」

鳥居の下にいた小蒔さんはぼくの方を向くと陽だまりのように明るい笑顔を浮かべて駆け寄ってくる。

足を踏み出すたびに小蒔さんのトレードマークともいえる二つのおさげがびよこびよこ小さく揺れる。

この二年間で一番仲良くなった人といえ、おそらく小蒔さんだと思っている。

ぼくの修行の内容はやはりというべきか、本家筋の修行を鹿児島に住める三年間で力

を制御できるレベルまでもっていけるように調整したものらしく、一年もたたずに基礎的なものが終わった後は小蒔さんと一緒に修行することが多かったのだ。

なればこそ一緒にいる時間も六女仙のみんなより多くなるため、一番仲良くなれたのも必然だったのかもしれない。

ちなみに本来の案内役である霞さんとは交代で順々に出迎えてくれている。

今では小蒔さんも初めて会った頃のようなおどおどした様子は全くなくなり、いつも笑顔で嬉しそうに接してくれるのを見るとこっちまで笑顔になってくる。

ただ、たまに笑顔じゃないときもあって…

「あ、あの…遼太くん。」

「?小蒔さん?」

「えつと…また、手をつないでもいいですか…?」

小蒔さんは赤くなった顔を俯かせて隠すと、それでも眼だけはしっかりとこちらから離さずに尋ねてくる。

そう、こうやって小蒔さんは時折ぼくと2人のときに毎回顔を赤くして恥ずかしがりながらも手をつなぐのを望んでくる。



正直に言ってこっちとしても恥ずかしい気持ちはあるのだが、断ろうとするとシュンツ、とマナリア海溝よろしく気分が落ち込んでしまうし、手をつなぐと顔は赤いままだが実に嬉しそうな顔をするので最近はどう断ろうとするのは諦めてたりする。

フランスにいた頃に明華お姉ちゃんに手をつなぐ以上のことをしよつちゆうされていたからというのも断ることをやめた理由の一つなのかもしれないけど。

「…はい。それじゃあ、一緒にいきましょうか。」

「…！うん！」

ぼくが手を差し出すと、小蒔さんはバツと顔をほころばせて手をつないでくる。

キュツ、とつながれた左手からたしかな温もりを感じながら、ぼくたちは歩幅を合わせて神境の道を進んでいった。

小蒔が遼太と出会ったばかりの時の印象は『不思議な男の子』だった。

小学2年生の春、本家筋の男の子が力の制御の修行のために霧島神境へやってくる  
と聞いて、驚きと同時にとても緊張していた。

本家の力を持った男子がいるということ自体初めて聞いたことだし、なにより今まで  
男子と接することがほとんどなかった小蒔にとってはその本家筋の男の子というのは  
未知の対象だった。

だが、実際にその男の子——遼太と出会い、話して、その緊張はすぐに薄れていっ  
た。

綺麗な銀色……。

言葉を交わす前に、小蒔が本当に抱いた第一印象はおそらくこれだっただろう。僅かなくすみすらない、それ自体が光を放ちそうなほど澄んだ銀髪。

今まで見たことのないそれに目を奪われ、我に返るまで僅かながら時間がかかってしまった。

初日はそれから自己紹介と交流がてらの麻雀を一局だけして終わりすぐ別れることになった。

修行のために遼太は霧島神境に来て、小蒔たちとは初めての顔合わせで、一緒にいた時間はせいぜい一時間程度、しかも会話をしたのは十分となかったといえるほどの短い時間だった。

それなのに、別れるときに寂しいと小蒔は思った。

これに関しては、小蒔だけでなく六女仙も同様だった。

遼太が彼女たちにとって珍しい存在だったからというのも理由の一つだったかもしれない。

霧島神境で過ごししてきた今まででまともに見たこともない同世代の男の子。

加えて明らかに日本のそれではない銀髪と朱瞳。

遼太のどこか幻想的な容姿は彼女たちにとっての未知を興味に変えてしまうのは自然なことだっただろう。

だが、小蒔たちが寂しいと思った理由の多くは遼太のその性格や雰囲気によるものだろう。

物腰が柔らかく、常にこちらを慮る年不相応の話し方。

どこか目が離せない、気付けば傍にいたいと思わせてしまうような、そんな儂さや安心感を与えてくれる雰囲気。

さらには対局のときに見せた麻雀に対する熱と勝負に対する意思という、年不相応な印象を感じさせる普段とのギャップ。

そんな様々な面を見せる不思議な男の子に、意識的か無意識的か彼女たちは惹かれたのだ。

遼太たちが一緒にいた時間は一時間程度。

だが、遼太のその人を惹きつける力が小蒔たちに影響を与えるのには十分すぎるほどの時間だった。

それからは小蒔にとつて遼太という存在は『大事な友達』にまでなつていた。なつていたはずだった。

遼太を想う感情の転機は、ほんの些細なこと。

神代小蒔は数少ない本家筋の人間であり、六女仙を従える正真正銘の霧島神境の姫君である。

故に、彼女に対する態度や扱いは世間一般の同世代の女の子のそれとは大きく異なつていた。

彼女より何倍も長く生きてきた大の大人たちが齡が両の手で数えられる程度の少女にへりくだ遜り、直接触れることすらはばか憚られてきた。

例外としては小蒔と同年代の霞たち六女仙がいるが、やはり子どもながらも姫君と六女仙、主と従者という関係が根底にあるからか、仲がいいのは確かだがどこか一歩引いた親交になつていた。

そんな中、遼太だけは普通だった。

いや、彼もまた小蒔に対して敬意は払っていたし、常に慮っているが、それはあくま

で年上の女性としてや修行の先輩としての意味合いが強く、同時にそれが遼太にとっての当たり前であった。

なればこそ、遼太は小蒔だけでなく霞たち六女仙にも神境の大人たちにも同じような態度で接している。

つまり、小蒔だけを特別視しなかったのだ。

それに小蒔が気付いたとき、どれだけの嬉しさがあつたのかは彼女の立場を考えれば想像に難くないだろう。

だからこそ、ある日小蒔は霞にあるお願いをした。

「あの、霞ちゃん……ちよつとお願いがあるんですけど……」

「あら、珍しいわね。どうしたの？」

「き、今日の遼太くんの出迎え、私にさせてもらえないかなって……」

「それは構わないのだけど……何か理由でもあるの？」

「あ、いや！何かあるわけではなくて……！で、でも何もなくて……」

そうしどろもどろに言う小蒔は顔を赤らめながら手をパタパタと振り、どんどん声量

が小さくなり顔を俯かせる。

今まで見たことのないような表情を浮かべる小蒔を見た霞は何かを察したのか、小さく微笑んだ。

「それじゃあお願いしようかしら。あと10分もすれば来ると思うからそろそろ準備した方がいいわよ?」

「…はい、行つてまいります!」

そうして鳥居の前まで走り待つこと数分、コツツコツツと音を立てながら階段の奥から遼太が顔を覗かせた。

小蒔を視認した遼太はわずかに驚いた顔をすると声をかける。

「小蒔さん?どうしてここに…」

「えっと、少し話が…というより、してほしいことがあるといいますか…」

そこで一度言葉を切った小蒔は深く深呼吸を始める。

そして数十秒後、ようやく落ち着きを取り戻したのか最後に一度ゆっくり息を吐く

と、覚悟を決めたような顔でまっすぐ遼太を見て、口を開いた。

「広間に着くまででいいので、手を…つないでくれませんか!!」

「へ…?」

完全に想定外の言葉だったのか遼太はポカんと呆けた表情を浮かべる。

だが、相当な勇気を振り絞ったであろう小蒔の表情は真剣そのもので冗談を言っている風ではないのは分かるし、そもそも小蒔が冗談を言う性格ではないのは遼太もよく理解している。

しかしなぜそんな頼みをされるのか皆目見当がつかなかったのか、遼太はとつさに言葉返すことができなかった。

やや思考停止していた遼太を見て不安に思ったのか小蒔は二の句を継ぐ。

「ダメ、でしようか…?」

「あ…。…いいえ、そんなことでよければ。」

かぶりをふるとゆっくりと左手を差し出す遼太。



小蒔はまだ緊張があるのか両手をキュツと胸の前で組む。が、そうするのも束の間、手を開くとその両手で目の前にある左手を包み込む。

「…温かい、ですね。」

「そう、ですね…」

包んだ手から感じる温もりに小蒔が頬を緩めると、遼太もつられて微笑む。

小蒔は人の温もりをその身で感じる機会はほとんどなかった。

親の愛情はあつたのだろう、六女仙のみんなも仲はいいし神境の大人たちもよくしてくれている。

だが、やはり霧島神境の姫という立場からか、直接誰かに触れることなど物心がついた頃からは既に皆無だった。

覚えている限りでは初めてとっていいくらいの人温もり。

触れ合っているのは手だけなのに、どうしてか体の芯まで、そして心までもが温かくなつていくかのように感じる。

その温もりを忘れまいと、逃すまいと小蒔はさらに強く手を握り締める。

それを感じた遼太もまた、小蒔の手を少しだけ強く握った。

——好きです。遼太くん。

「あ、いらっしやい遼太くん。小蒔ちゃんも出迎えお疲れ様…つて、あらあら。」

「…遼太と手をつないでる…」

「へ!? あ、これは…!!」

霧島神境本殿に着いていつもの広間に入ると、そこにいたのは霞さんと春の二人。他の六女仙の面々はどうやらまだ修行中らしい。

二人はこちらを視認するとまず目を向けたのが未だにしっかりとつながれた僕と小蒔さんの手。

霞さんは微笑ましいものを見たような目を、春は表情こそほとんど変わっていないけど僅かにジトツとした目をそれぞれ向けてきた。

小蒔さんは春にそう言われてようやく未だに手をつないでいることを思い出したのか、先程よりも顔を赤くさせてあわあわと手を放す。

そういえば誰かに見られるのは初めてだっけ、と思いつながら遼太も遼太で少し赤くなった顔をごまかすように横に眼を背けながら頬をかいた。

「遼太…」

「どうしたの春…ムグッ！」

「あら。」

呼ばれた遼太が春の方を向くと、突然口の中に何かを押し込まれた。

大方さつき手に持ってた黒糖だと予想がついた遼太だが、彼にとつて問題はそこではなかった。

口に入った黒糖のまろやかな舌触りとは別になんだか細くて生暖かいものが同時に舌に当たる。

咄嗟に視線を下に向けるとそこにはいまだに口の中に入ってる春の指が見えた。

「!?…っぷは、春！いきなり何を…」

「美味しい?」

「へ?あ、うん、風味があつて美味しかったけど…つてそういうことじゃなくて!」

遼太は咄嗟に春の腕をつかんで口から離す。

春はそれを気にしないかのようにコテンと首をかしげて感想を聞いてきて、遼太もその空気につられたのか素直に感想を返すが、いやいやとすぐ首を振る。

さすがに遼太もこんな経験は初めてだったのか普段のようなどこか大人びた印象は鳴りを潜め、年相応な慌てた様子を見せる。

「それならよかった。」

「いや、だから春つてば……………ん？」

ふと、遼太はあることに気が付いて視線が固定される。

その視線の先にあつたのは春の顔。

より正確には、わずかに赤みがさした春の頬だった。

滝見春という少女は表情を変えることはあまりない。

しかし、それは決してポーカーフェイスをしているのではなく感情が表情に出にくいということであり、彼女の性格自体はいたって素直なのだ。

それに、表情に出にくいだけであって全く出ないわけではない。

むしろ、その素直な性格と相まって小さいながらもたしかに表情に変化は起きるため、しっかり見ていれば春の感情を読み取ることがはさして難しくはない。

「…えっと、もしかして春も恥ずかしかったの？」

「……………ん。」

「それで誤魔化そうとあんな…」

さっきの行動にようやく納得といった様子を見せる遼太。

無論遼太にはなぜこんなことをしたのかということまでは分かっているのだが、そこは前世で同年代の女性関係がほとんどいかなかったために特別な誰かを好きになることがなかったが故である。

所謂初心なのである。

一つ言及しておくくと、遼太は人の感情の機微には聡い方である。

それは明華をはじめ、小蒔たちもその身をもって知っていることだが、彼はそれが自身に向けられたものになると途端に鈍くなる。

それはもう好意であろうと対抗心や嫉妬心であろうと直接口に出して伝えない限り伝わらないほどだったりする。

んー、と遼太が未だに春の行動の理由を考えていると、完全に思考に耽っていたのか後ろからギュッと抱きしめられるまで誰かが背後に回っていると気づかなかつた。

「ひゃっ！」

突然のことに遼太が素っ頓狂な声をあげて慌てて後ろを振り向くと、いつもの笑みを崩さず遼太を見つめる霞と目が合った。

加えて二人の体格の関係上、後ろから全身を包むように抱きしめられている遼太は霞から香る甘い香りや既に小学生とは思えないほど発達したふたつのおもちの感触をダイレクトに感じられ、耳まで赤くなりながらも極力意識しないようにしながら話を進める。

「か、霞さん？」

「小蒔ちゃんとか春ちゃんとは触れ合って、私には何もしてくれないのかしら？」  
「あ、それは…」

霞はさらに抱きしめる力を強くする。

遼太はこの2年間霧島神境で一緒にいて分かったことがある。

それは、霞は意外とからかい癖があるということだ。

遼太と霞が初めて会った日もそうだったが、霞は時折こうして遼太のことをからかうことがある。

時には言葉で、時には今回のようにその身でもって。

遼太にとってはボディータッチなどは明華で多少の耐性はついていたが、それでも当時の明華と今の霞とでは歳が違えば体の成長具合も違う。

故にこうされるのも慣れずに未だに毎度のことドギマギしてしまう。

そしてそれを見るたびに霞はイタズラが成功したような笑顔を見せる。

だからこそ、今から遼太がすることはちよつとした意趣返しである。

遼太は体にまかれていた霞の腕を優しくほどくと、反対を向いて霞と正面から向かいあう。

この時点で霞はキョトンとした表情を浮かべるが、それに遼太はさして触れることもなく意を決したような表情で顔を霞の目と鼻の先まで近づける。

いきなり視界が銀と朱に染まったことでようやく事態を察した霞は狼狽えながらも言の葉を紡ぐ。

「遼太くん？ど、どうしたのかしら…？」

「……………」



いつものどこか余裕を持った雰囲気からかけ離れた霞の様子に内心もうやめようかとわずかな罪悪感にとらわれた遼太だが、自分でも分からない謎の意地によって踏みとどまる。

そして遼太はゆっくりと右手を上げると、それを霞に向けて伸ばす。

霞はからかいすぎて怒られると思ったのか咄嗟にギョツと目をつぶってしまう。

遼太が手をあげるなんてことは万が一にもありえないと頭では分かかっていてもそうしてしまうのは、大人びていても霞がまだまだ子供であるという証左なのだろう。

目をつぶって何も見えていない霞が次の瞬間に感じたものは、何かが頭にのせられたような感触だった。

予想にもしていなかった出来事に霞が目を見開くと、そこにあつたのは自分の頭にのせられた右手と、どこまでも優しさに満ちたような瞳でこちらを見る遼太の姿だった。

「いつものお返し、なんてね。」

「え、あ……」

霞は突然のことで茫然自失となる。

遼太はそれを見るとまるで割れ物を扱うかのようにゆっくりと霞の頭をなでる。

なでられた霞は恥ずかしいやら嬉しいやら心地いいやらと様々な感情が飛び交いながらも、無意識的に頭を少し遼太に向けて体を寄せる。

「ごめんなさい、怒られるって思ったんだよね。」

「それは…」

「まあ何も思わなかったわけじゃないんだけど。アレされるの、かなり恥ずかしかったんだよ?」

「ご、ごめんなさい。」

「うん。こつちこそごめんなさい。これでおあいこ、だね。」

「…ふふつ、そうね。」

二人は目を合わせると、はにかむように笑いあう。

あふれるように感じられるあらゆる暖かい感情。

それを見て、感じた小蒔と春もまた、頬が緩むのを抑えることはできなかつた。

別れのときほど今まで過ごした時間が短く感じられるもの。

前世から一向に慣れないなと思いつつ、お父さんの転勤で引越しの日を迎えたばかりはお母さんとともに霧島神境へ挨拶にきていた。

ぼくは大人の人たちに挨拶を済ませると、小蒔さんたちの方へ向かう。

小蔭さんや霞さんたち六女仙のみんなはそれぞれ寂しそうな表情をしながらも、それでも決してぼくを引き留めようとはしなかった。

「みなさん、今まで本当にありがとうございました！」

ぼくがそう言うと、みんなもそれぞれ言葉を返す。

「ええ、こちらこそありがとうございます。本当に、忘れられない日々だったわ。」

「たまには、連絡してくださいね？」

「いつでも私たちは大歓迎なのですよー。」

「さようならば、言いません。絶対にまた会えると信じてますから。」

「待つてる。」

「お兄さん、一緒にいれて楽しかったです！」

「お兄さん、向こうでも、お体には気を付けて…」

皆の言葉で思わず涙が出てきそうになる。

明星ちゃんと湧ちゃんなんかは言葉を伝えたら泣き出してしまったほどだ。

た。  
なんとか二人をなだめ終わると、今度は小蒔さんが瞳を潤わせながら一步前に出てきた。

「遼太、くん。最後に手を、つないでいいですか？」

「…はい、もちろん。」

なんとなく小蒔さんの言うことが予想出来ていたぼくは小蒔さんが差し出した両手を同じく両手で握り返す。

小蒔さんはつながれた手を見ると顔を綻ばせる。

それを見てぼくやみんなも笑顔になる。

たっぷり数分間つながれた手がようやくやく離れる。

その間、誰も言葉を口にするとはなかったが、その沈黙が嫌なものでなかったのはもはや言うまでもないことだった。

「遼太。」

「…うん、分かった。」

お母さんに呼ばれ、ぼくは荷物を持ちお母さんの元まで歩く。神境の出口までいくと、最後にみんなの方へ振り返る。

「きつとまた会えます。だから、またね。」

別れを告げる言葉ではなく、再会を約束する言葉。

それを聞いた彼女たちが返す言葉もまた、同じものだった。